

第4回 愛の実践家 アルベルト・シュヴァイツァー

10:14 ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。15 遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか」と書いてあるとおりです。16 しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。イザヤは、「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言っています。17 実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。(ローマの信徒への手紙)

11:1 信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。2 昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

12:1 こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、2 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもちとわなないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。(ヘブライ人への手紙)

1 愛の宗教(第2回目)

- ・ 聖書のメッセージを端的に要約しようとするならば、「愛」という点からまとめることができる。「インマヌエル」(神は我々と共におられる)。キリスト教は愛の宗教である。
- ・ 愛の二つの形 - 神への愛と隣人愛 - 、二つの愛は不可分である。
神への愛は隣人愛への具体化を求め、隣人愛は神への愛という源泉を必要とする。
礼拝と社会的実践とはあれかこれかではない。
- ・ 愛は自明か? 愛されるという経験の意義
経験の伝達: 知識? 共に生きる中での感性的な理解 教育、そして家庭
第一ヨハネ
- ・ 愛は掟? 戒めとしての愛
モーセの十戒の構造: 神関係と人間関係の二重性
神関係が人間関係の基礎であるという考え方 律法とは本来そうしたものの
- ・ 隣人とは誰か? 「善きサマリア人」の譬え(ルカ福音書 10.25-37)
問いの転換: 「では、わたしの隣人とはだれですか」

「行って、あなたも同じようにしなさい」(隣人になるという課題・責任)
「隣人 - 非隣人」(敵と味方)という枠組みを超えて

2 . 模範・証人たち 愛がかわるようになる

3 . シュヴァイツァー (1875 - 1965)

神学者、説教者、オルガン演奏家・バッハ研究者、医者

ノーベル平和賞 (1954)

1890:オイゲン = ミュンヒにパイプオルガンを習い始める

1893:シュトラースブルク大学入学 (神学と哲学専攻)

1896:ペンテコステの朝に、30 才までは学問と芸術のために生き、それからは人間に直接奉仕することを決意

1902:神学部講師となる (『メシア性の秘密と受難の秘義』)

1905:医者としてアフリカに行く決心

1906:『イエス伝研究史』完成

1911:外科の試験に合格、医学の過程を終える

1912:大学講師と牧師職を辞任。ヘレーネ = プリスラウと結婚

1913:医学の学位を取得。ランバレネで病院の活動開始

1915:「生命への畏敬」の思想

1917:フランス本国の捕虜収容所に入るように命令を受け、ランバレネを去る

1923:『文化の退廃と再建』『文化と倫理』を完成 (文化哲学)

1924: 病院再建に努める

1927:新病院への移転

1928:ゲーテ賞を受ける

1954:ノーベル平和賞 (「現代における平和の問題」)

1957:原爆実験中止を訴える声明

4 . 生命への畏敬

・ 現代における理想の喪失と文化の危機

・ 経験、直感

幼い頃のシュヴァイツァー、動物の苦しむ姿に心を痛める。「汝、殺すなかれ」

1915 年 (40 才) 治療のためにオゴーウェ川を遡る途中で、「生命への畏敬」という考えをひらめいた。生きようとする自分の生命は無数の生きようとする生命に囲まれている。この生きとし生けるものすべての生命を尊ぶことが倫理の根本である。

・ 愛の広がり

すべての生命には自分と同様に生きる意志があり、畏敬すべきである。共感。

「生きようとする意志」は人間だけでなく、すべての生命がもっている。「生命への畏敬」に基づく生命の尊重は、人間だけでなく、すべての生命に適用されなければならない。

・生き生きした直感に基づく愛、感性の問題

知識、意志、感情の全体における関わりとしての愛 信仰のダイナミズム

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(マルコ福音書 12.30)

5 . 隣人愛の拡大

家族・親戚

同民族

敵対者

異民族

人間以外の生命

すべての存在するものへ

6 . 神の家族

2:13 しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。14 実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、15 規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、16 十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。17 キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。18 それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。19 従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、20 使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、21 キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。(エフェソ)

7 . 動物たちのクリスマス

2:8 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」13 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。14 「いと高きところには栄光、神にあれ、/地には平和、御心に適う人にあれ。」15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16 そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。17 その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。18 聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。19 しかし、マリア

はこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。
(ルカによる福音書)

クリスマスを前にして

神は人間だけを愛されたのではない。神の契約はすべての生命へを及ぶ(ノアの契約)、
希望の共有(ローマ 8:18-30)

8 . キリスト教信仰の意義

生き生きした信仰の直感に基づく愛の実践
環境に優しい生き方・ライフスタイルを目指して

<文献>

- 1 . 小牧治・泉谷周三郎 『人と思想 シュバイツァー』清水書院
- 2 . アルベルト・シュヴァイツェル 『われら何をなすべきか 倫理の問題に関する12章』
新教出版社
- 3 . シュバイツァー日本友の会 <http://members.aol.com/aschweitzerfoj/>